聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第１１章　祈りについてのパウロ　その１③

聖霊に満たされた生き方
いかなる機会に際しても祈る

聖霊に満たされた生き方

今日、聖霊を新しく体験する人々は無数にあります。彼らは［エペソの長老たちのように（使徒 19:6)］新しい言葉を語っています。また、預言をしたり、聖霊の他のみわざを目の当たりにしたりもしていることでしょう。宗教関係の人口統計の第一人者であるデイビッド・B・パレットによれば、二十世紀最後の十年間には、全世界のペンテコステ派・カリスマ派の人々は 3 億 5300 万人になったということです。

しかし、パウロの時代、特にエペソの教会のように、かつての躍動的で燃えるような体験は、いともたやすく無価値な生き方に取って代わられることがあります。福音を前進させるようにではなく、その障害となるような生き方に変わってしまうのです。パウロには、この問題に対する解決策がありました。

> また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。**御霊に満たされなさい。**詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。（エペソ 5:18-20）

パウロのきよめられた考え方によれば、これは霊的な前進にとって標準的な手順でした。聖霊に満たされることに反する方向で働くようなものは、聖霊に満たされた生き方に到達してそれが維持されるようになる前に、正しく認識し、消し去ってしまわなければならないのです。たとえとしてアルコールの話を持ち出すならば、ワインや他の種類のアルコール飲料への賛成を主張するクリスチャンは、同時に、聖霊に満たされること

には反対だと主張しますが、（訳注：聖霊に満たされることと満たされないこととの）両者の間には、相容れるものは何も無いのです。なぜなら、神を切に求める人にとって従うべき道は、**「御霊に満たされなさい［著者注：満たされていなさい、満たされ続けなさい］」**という、ただ一つしか無いからです。そして、聖霊に満たされるためには、その目指すところに祈り深く関心を向ける必要があります。

聖霊のバプテスマは、きわめて重要で、かつ、いただくことのできる体験です。にもかかわらず、その体験が、その後も継続した目的を有するものならば、聖霊に導かれた継続的な生き方こそが必然的な結果とならねばなりません。その生き方は、それを妨げる障害を避け、前進させるものを尊重する、弟子としての（自らの）鍛錬を含む生き方です。聖霊に満たされた生き方の証拠としてパウロが示唆している行為の一覧（5:19-20。瞑想、讃美、感謝、服従）は、同時に、そのような生き方に向けて神が定めてくださった手段でもあるのです。

ここで「ラルーンテス・ヘアウトィス」という表現を、「互いに語り合う」ないし「自分たちの間で語り合う」と翻訳する人もいますが、その意味を**「自分自身の内で語る」**という意味に理解しても誤りではありません。パウロは第一コリント 14 章 28 節においても同様の表現を用いています。**「もし解き明かす者がだれもいなければ、…自分だけで、神に向かって話しなさい」。**したがって、**聖霊に満たされた生き方**は、詩篇や讃美、霊の歌という手段で表現される、内なる礼拝によって養われるということも可能です。私たちは、**「詩」**という言葉を、まずは旧約聖書の詩篇に関連づけて考えてしまうかもしれません。それも排除すべきではありませんが、ここで冠詞が無いということは、意味はもっと一般的なもの、すなわち伴奏つきの、詩篇のような性質の歌でもあるのです。また、**「讃美」**という概念は、父なる神とキリストへの讃美を表現した歌を指すように思われます。**「霊の歌」**という表現については、意図されている意味だけでなく、パウロはここで、第一コリント 14 章 15 節の**「霊において賛美し」**で語っていることを強く示しているように思われます。これは、異言によって神への讃美を歌うことです。

第一コリント 14 章 26 節では、これらのことが、人々が共に集まる時に現れることが示されています。「詩篇」という言葉は、楽器の伴奏を含むものです。**「心の中で」**という表現は、「心を込めて」のように翻訳したり、会衆讃美に加わりつつ、自らの心も音楽で満たされているような様子を意味したりすることができます。旧約聖書の用法では、旋律を作るということに楽器も含まれていました。続く節の**「互いに従いなさい」**は、パウロが、個人の心の中だけでなく、教会の人々の間で起こっていたことについても語っているということを示しています。

ハロルド・ホートンは次のような考察をしています。**「『霊の歌において』…自分自身に語る、すなわち、聖霊によって与えられた旋律や韻律を異言で歌うということである。語るというのは、歌においても、なのだ。それゆえ、御霊によって自分自身に語るということは、私たちの徳を高めるものとなる。…異言で語るなら、ある世界のこの不毛な荒野にあって、自らの内に井戸をいただくのである。歌うということはそれゆえ、乾ききった砂漠に泉を起こすことなのである」。**

「心の中で［あるいは、心を込めて］主に歌うことと音楽を作ること」は、内なる人の私的な聖域から詩篇、讃美、霊の歌があふれ出ることを意味しているように思われるのです。

感謝を捧げることは、聖霊に満たされた歩みにとって、まさに本質的なものです。そして同時に、聖霊に満たされた生き方をするための、一つの重要な手段でもあるのです。**「いつでも……感謝」する**ということは、魂が神のご臨在に近づいていくことです。それは、父なる神へと導かれることであり、聖霊はまさにその父なる神から来られます。そしてこのことは、父なる神に近づくための唯一の方法である、主イエス・キリストの御名によってなされるのです。

祈ることにとっての従順は、人間の体における血のようなものです。従うことなくしては、祈りはただの、冷たくも命のない形式となってしまいます。パウロが用いている「ヒュポタッソー」というギリシア語は、「下につく」「従属する」「進んで譲る」という意味です。**従順**は、聞かれる祈りを根底から支えるものです。また、聖霊に最初に満たされるにあたっては本質的なことです。

従順のたゆまぬ実践なくしては、聖霊に満たされた生き方はあり得ません。従うことこそ、至聖所に招き入れていただける秘訣なのです。それは常に、従う本人の自発性によるものであり、人間存在の核となるところ、中心的な意志から自発的に溢れ出るものだからです。もしも強要されたり強制されたりしたなら、それはもはや従順ではなくなってしまいます。**従うことの模範はイエスでした。**イエスは、毅然として「わたしがいつも、その［著者注：父なる神の］みこころにかなうことを行うからです」（ヨハネ 8:29）と語ることができました。イエスはまた、**「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」（マタイ 11:29）**とも語っておられます。「わたしは心優しく、へりくだっているから.…」とは、**「私は父とそのみこころに完全に従っているから」**というのと同じ意味です。

「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい」とは、クリスチャン共同体において、他の必要な服従がすべて、井戸のように溢れていることを前提としています。本質的な服従は私たちの主ご自身に対するものです。これがしっかりとあってこそ、神の家族における服従というものが、神によって明確に与えられた秩序に従って（Ｉコリント 11:3、エペソ 5:21、6:9）なされ、きわめて自然なものとなるのです。信仰の家族の内部で従い合うということが欠けているならば、それは神に対する本質的な反抗に元をたどることができます。従順を拒むということは、まさに本質において、祈りと、聖霊に満たされた生き方にとっての妨げとなるのです。

いかなる機会に際しても祈る

ほとんどのクリスチャンにとって、危機に瀕して祈るのはたやすいものです。しかし、神との通常の交わりなくして危機の時だけ祈るというのは、電話線のメンテナンスがされていない「いのちの電話」に電話を掛けようと受話器を取るようなものです。パウロは、エペソのクリスチャンに規則的に、集中して、忍耐深く祈るように励ます中で、私たちの祈りの習慣についての神の意図を把握しています。

> すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音の奥義を大胆に知らせることができるように私のためにも祈ってください。（エペソ 6:18-19）

キリストの兵士の武具という比喩を引き合いにしつつ（6:10-17）、パウロは 18 節と 19 節にて、すべてのクリスチャンにとって信仰上の戦いで成功を収めるために最も決定的な要素に焦点を当て、クリスチャンの格闘という考えを、続けて述べています。**その要素とはすなわち、祈りです。**

祈りは、霊的な武具を身につけるという、先行する教えの中に確かに示唆されてはいますが、パウロはここでは具体的に、多様な祈りのアプローチを提唱しています。

私たちはこの暗闇の世の勢力と悪しき霊的な勢力に敵対されているわけですから、**常に祈っていなければなりません。**ギリシア語の「エン・パンティ・カイロー」とは、**「あらゆる時に」**という意味です。これは、気軽な挿入句ではありません。これは非常に大きな領域を占め、大きな結果を招くものであり、断固たる決意をもって取り組まなければならないことなのです。この戦いが、自らの貧弱な知性とアダムから引き継いだ性質の力をもってすれば首尾よく勝利が収められると信じているなら、「ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回って」（Ⅰペテロ 5:8）いる者には到底かなわないのだということに、痛みをもって気づくこととなるのです。

ギリシア語の「ディア・パセース・プロスューヘース」とは、**「あらゆる種類の祈りを通して」**という意味です。18 節はこの言葉で始まりますが、そこには、先行するクリスチャンの武具についての文章からの切れ目がありません。すなわち、実際のところパウロは、**「神の武具をもれなく身につけなさい［著者注：6:11］…そして［サタンに対して］しっかりと立ちなさい［6:14］。聖霊の剣を手に取りなさい［6:17］」**と語っているのです。完全な武具とは祈りを通して身につけていくことになるのか、御霊の剣（神のみことば）だけを手にするのかについては、議論をしても無意味です。**祈り**とは、信仰の戦いの道具なのであり、防御用の武器と攻撃用の武器を効果的なものとするものなのです。

「すべての祈り」の中には、私的な祈りとともに公共の場での祈りも、形式的な祈りとともにリラックスした祈りも、声に出しての祈りとともに黙祷も、願いの祈りとともに讃美の祈りも、即興の祈りとともに準備された祈りも、知性による祈りとともに聖霊による祈りも含まれます。**「祈り」**とは、ギリシア語の「プロスューヘー」からのものであり、**「願い」**とは「デエースィス」からの言葉です。「プロスューヘー」は一般的な祈りを代表するものであり、「デエースィス」は特定の必要のための祈りを意味しています。**「願い」**とは、悪が取り扱われ、義が勝利を得るまで忍耐する、強い、諦めることのない祈りを含意するものです。**「御霊によって」**とはおそらく、「聖霊を通して」と翻訳したほうが良いでしょう。パウロが念頭に置いていたのはおそらく、異言で祈ること（Ⅰコリント 14:14 参照）であったように思われます。この方法によって、クリスチャンの祈りは、知性を超えて引き上げられ、神のみこころに沿って捧げられるのです。

クリスチャンは、（何を祈るべきか知ってくださっている）聖霊の導きのもとで常に祈らなければならないだけではありません。祈りに熱心であるとともに、この信仰の戦いにある「あらゆる聖徒たち」のためにも願いを捧げなければならないのです。パウロはそこで、クリスチャンたちからの油断のない祈りを求めることにより、自らの謙遜さとともに真剣さを示して見せています。自分の働きのために祈りの支援を求めるこの要求は、福音を宣べ伝える人にとっては第一に願い求めるものであるべきです。**サタンは**、恐れによって大胆に語れなくさせるにせよ、思いを混乱させることによって明確に語れなくさせるにせよ、神のしもべの口を閉じさせようとあらゆる手段を用いてくるからです。